

木山ビジョン2026

素案

&木山仮設団地跡地における暮らしの拠点づくり計画

[2026.3.27時点版]

目次

CONTENTS

木山ビジョン

CHAPTER 1	ビジョンの概要	P2
CHAPTER 2	ビジョンの基本的な考え方	P6
CHAPTER 3	益城町の現在地／これまでの歩み	P10
CHAPTER 4	益城町／木山地区の課題	P15
CHAPTER 5	目指したい姿	P20

木山仮設団地跡地における暮らしの拠点づくり計画

CHAPTER 6	木山ビジョンを踏まえた、木山仮設団地跡地のあり方	P26
CHAPTER 7	エリアの将来イメージ	P30
CHAPTER 8	事業の実現に向けて	P36

Chapter

1

ビジョンの概要

1 ビジョン策定の背景

益城町の中心部に位置する木山地区は、行政機能や公共施設などが集まる町の中核として、町民の暮らしを支える都市拠点の役割を担ってきました。今後、社会環境の変化が進む中においても、木山地区が人々の交流や活動の拠点としての役割を高めていくことは、町全体の活力や持続的な発展を目指すうえで重要と考えます。

また、木山地区は熊本地震により大きな被害を受けた地域でもあり、復興の歩みの中で得られた経験や教訓を次の世代へ継承していくことが重要です。日常の暮らしの豊かさと、非常時における支え合いの仕組みが両立するまちの姿を示していくことも、これからの地域づくりにおいて大切な視点となっています。

こうした背景を踏まえ、益城町では、将来を見据えながら、木山地区全体の将来像と取り組みの方向性を町民・事業者・行政が共有し、公民連携のもとで持続可能なまちづくりを推進していくためのよりどころとして、本ビジョンを策定することとしました。

そのうえで、木山仮設団地跡地は、木山地区の未来像を具体のプロジェクトとして形にし、町内外に発信していくためのひとつの核となるフィールドです。平時は心地よい日常の居場所として、災害時には支え合いの拠点として機能する“フェーズフリー”の考え方も踏まえ、この核となるエリアだけでなく、木山地区全体が連動するような“暮らしの拠点づくり”を進めていきます。

1 ビジョンの位置づけ

エリア全体のビジョンと中核プロジェクトの2本柱

本ビジョンでは、木山地区全体の将来像と取り組みの方向性を共有する“将来ビジョン”であると同時に、木山仮設団地跡地における具体のプロジェクトを示す“拠点づくり計画”を兼ね備えた構成になっています。

まず先に木山地区全体の未来像・価値観・連動の考え方を示し、その考え方を踏まえたうえで、木山仮設団地跡地をフィールドとして“暮らしの拠点づくり”の概要（機能、空間像、進め方等）を指し示しています。



1 策定のプロセス

本ビジョンは公表をもって完成となるものではなく、町民・事業者・行政が対話を重ねながら今後も改良を重ねていく「更新型のビジョン」です。社会情勢や暮らしの変化、災害リスク等を踏まえ、必要に応じて見直し・編集を行いながら、現実に即したよりどころとして磨き続けます。

このため、ビジョン名称には年度を付し（例：木山ビジョン2026）、その時点の状況に合わせてアップデートする場合があります。



Chapter

2

ビジョンの基本的な考え方

2 まちづくりのキーワード

住みたいまち

住み続けたいまち

次世代に継承したいまち

第6次益城町総合計画第2期基本計画

P3-まちの将来像-より引用

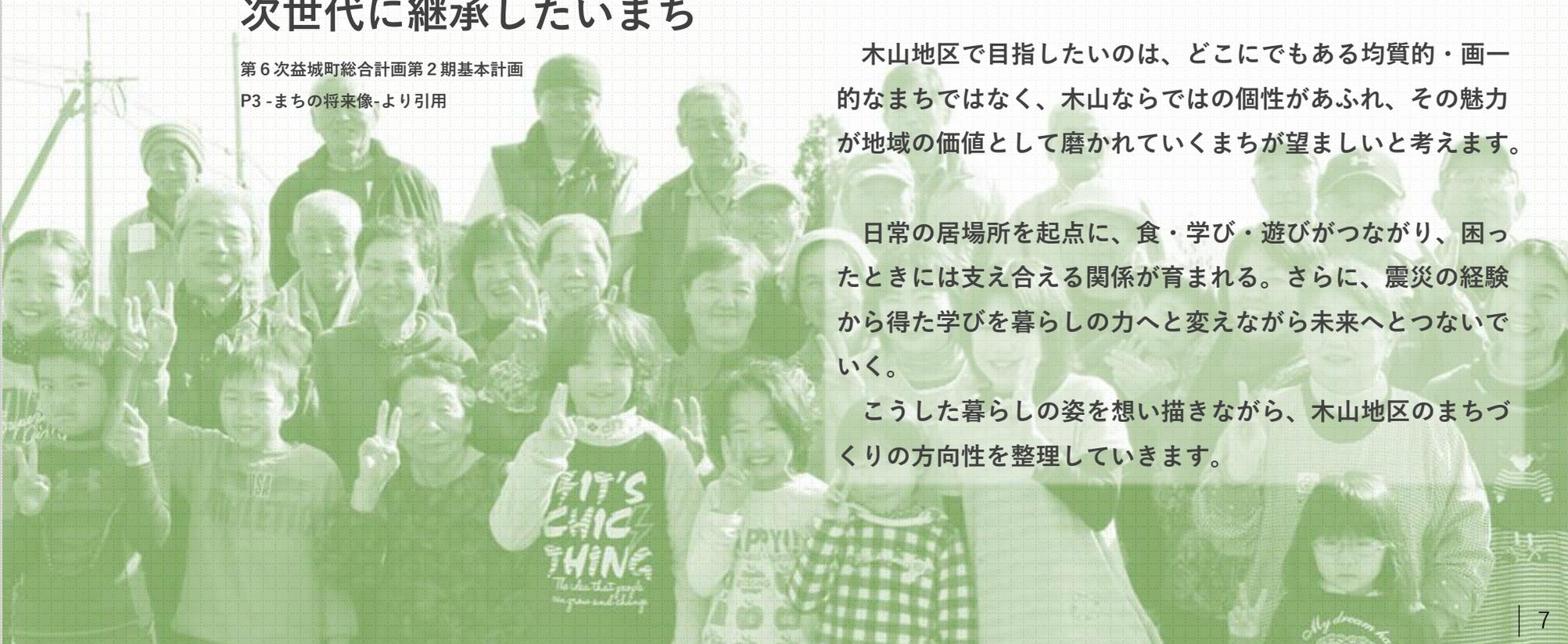
益城町では、第6次益城町総合計画第2期基本計画において、まちの将来像「住みたいまち・住み続けたいまち・次世代に継承したいまち」を掲げています。

この理念は、町の中心部に位置し、都市拠点としての役割を担う木山地区においても大切にすべきものです。

木山地区で目指したいのは、どこにでもある均質的・画一的なまちではなく、木山ならではの個性があふれ、その魅力が地域の価値として磨かれていくまちが望ましいと考えます。

日常の居場所を起点に、食・学び・遊びがつながり、困ったときには支え合える関係が育まれる。さらに、震災の経験から得た学びを暮らしの力へと変えながら未来へとつないでいく。

こうした暮らしの姿を思い描きながら、木山地区のまちづくりの方向性を整理していきます。



2 次の世代に残したい未来を考える

「自分の子どもたちや孫たちに住んでほしいまち」とは、どのようなまちでしょうか。便利さや効率だけでは測れない日々の暮らしの豊かさ。顔の見える関係のなかで育まれる安心感。公園や道ばたで交わされる何気ないあいさつや、地域の中で自然に生まれるつながり。他にもさまざまな要素が思い浮かびます。

木山ビジョン2026は、施設整備そのものを主眼とした計画ではありません。ここで暮らす人々の日常の営みやつながりを大切にしながら、この地域の価値をどのように育てていくか、その方向性を示すものです。

この地域で育った子どもたちが、大人になったときに誇りをもって語れるまちであること。そんな未来を見据えながら、木山地区のこれからのまちづくりの方向性を描いていきます。

2 地域の特性を生かす

木山地区はこれまで、多くの人が行き交い、さまざまな活動が生まれる場所として、また新しい情報や文化、人やモノが集まる地域としての特性を有してきました。

こうした地域の歴史や風土、これまで培われてきた地域特性を大切にしながら、それらの魅力にさらに磨きをかけていくことで、暮らしの質を高めるとともに、今後起こりうる地域課題も見据えた持続可能なまちづくりにつなげていくことが重要です。

また、遊ぶ・学ぶ・働く・食べる・休むといった日々の営みがまちの中で自然に重なり合うことで、「暮らしている実感」や「この町が好き」という気持ちが育まれていくことが期待されます。

新しいまちを一からつくるのではなく、木山がこれまで育んできた地域の力を活かしながら、その魅力をさらに高めていくという発想を大切にしていきたいと考えています。

Chapter

3

益城町の現在地 / これまでの歩み

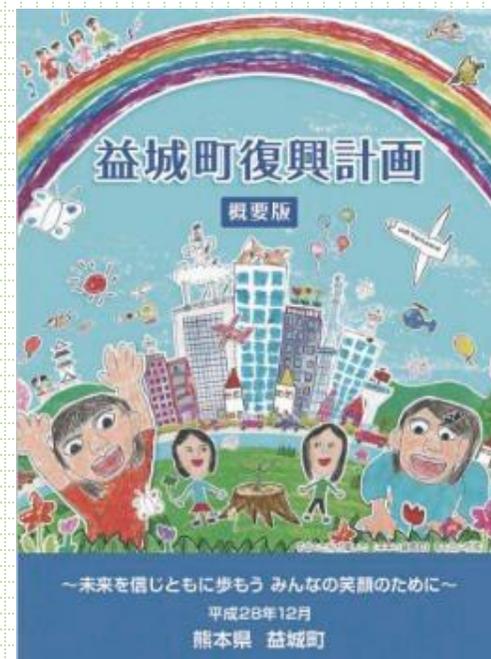
3 ターニングポイントとなった熊本地震

まちの可能性を広げ、さらなる成長を目指す“創造的復興”を選択

2016年4月の熊本地震は、益城町に甚大な被害をもたらしました。町の風景も、暮らしも、大きく揺さぶられました。

しかし私たちは、単なる復旧にとどまらず、まちの可能性を広げ、さらなる成長を目指す「創造的復興」を選択しました。それは、震災前に戻すのではなく、未来に向けて一歩踏み出すという決意でした。

インフラ基盤の再構築と安全な新住宅地の確保を同時に進める復興計画を描きました。



3 これからも伸びていく人口推移

全国的なトレンドとの違い

日本全体が人口減少局面に入るなか、自治体の将来可能性に関する分析では、益城町は「自立持続可能自治体」という分類に位置づけられています。これは全国1,700を超える自治体のうち、わずか65自治体、約3.8%に該当するものです。人口減少の進行度や構造は地域ごとに異なります。こうした特性を踏まえれば、全国的な縮小モデルを一律に当てはめるのではなく、益城町の実情と可能性に即した政策を考える必要があります。

[データ] 地方自治体『持続可能性』分析レポート
(人口戦略会議)

分類	自治体数	割合
自立持続可能自治体	65	3.8%
ブラックホール型自治体	25	1.4%
消滅可能性自治体	744	43.0%
その他の自治体	895	51.8%
計	1,729	

[データ] 益城町の将来人口の推計



3 県の事業推進と地域の力による復興の前進

木山地区は創造的復興を目指すうえで欠かせない重要拠点に

安全な新住宅地の確保に見通しが立ったことは、復興を大きく前進させる転機となりました。災害復興ゾーン（現・復興推進エリア）の設定とともに、木山地区は町全体の復興にとっても重要な拠点として位置づけられました。

町単独では実現が難しかった土地区画整理事業や県道熊本高森線の4車線化も、県に力強く推進していただくことで大きく進展しました。さらに、交通広場、復興まちづくりセンター“にじいろ”、地域共生センター“カタル”といった震災前にはなかった施設が完成するなど、地域の交流や活動の拠点としての環境が整いつつあります。



都市計画道路益城中央線拡幅事業
事業規模：約269億円（2026年3月末時点）



益城中央被災市街地復興土地区画整理事業
事業規模：約210億円（2026年2月末時点）

3 新たな道路ネットワークづくり

復興推進エリアにおいてまちを広げる戦略

復興推進エリアにおいては、新たな道路ネットワークの整備を柱とする街路事業が都市計画決定されました。その計画は、市街化調整区域にまたがる広がりを持つものです。

これは、将来の都市構造を見据えてまちの成長余地を確保するという政策的な考えのもと取り組んでいるものです。



Chapter

4

益城町/木山地区の課題

4 町内で過ごす場所の不足

日常生活を町外で過ごす人が多いという実態がアンケート調査から浮き彫りに

日常の買い物や飲食、余暇を過ごす場について、町外を利用する割合が高い状況が見られます。町内で「過ごす」「滞在する」場所が十分とはいえず、消費が域外へ流出し、地域内で経済が循環しにくい構造となっています。

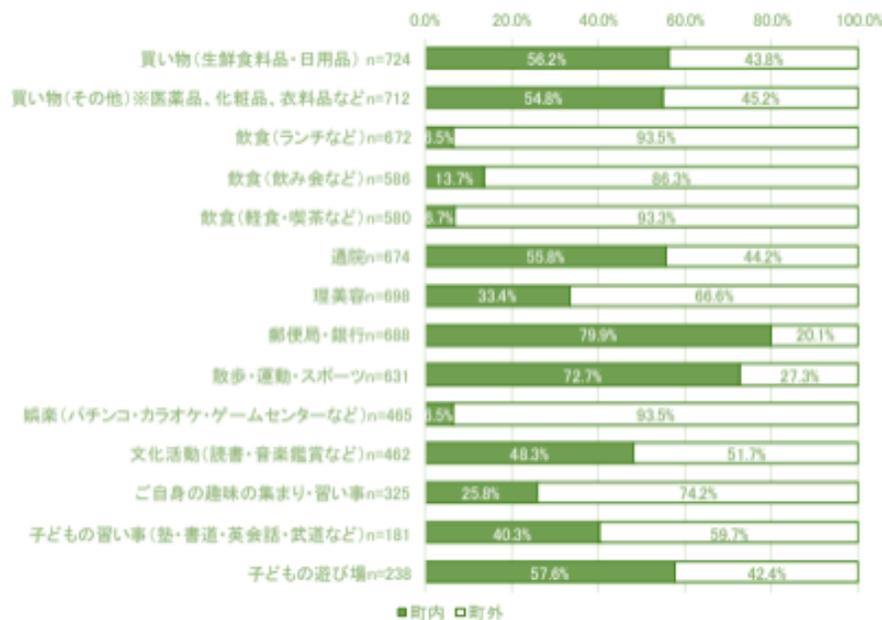
また、各種アンケートにおいても「商業施設を充実させてほしい」という意見は毎回多く寄せられており、町民の強いニーズがうかがえます。

[第6次総合計画フォローアップアンケート結果] R5.10実施

順位	設問	平均点	そう思う (3点)	どちらかといえば そう思う (2点)	どちらとも思わ ない (集計外)	どちらかといえば そう思わない (1点)	そうは思わない (0点)
1	気持ちの良い役場窓口対応を受けられるようになってきていると思いますか？	2.04	13.66%	48.29%	30.74%	3.53%	3.77%
2	役場の窓口がわかりやすく、スムーズに手続きができるようになっていると思いますか？	1.98	12.62%	48.35%	29.48%	5.19%	4.36%
3	健康の維持・増進のための健(検)診や相談を気軽に受けられる環境が整っていると思いますか？	1.94	9.47%	49.19%	30.83%	7.74%	2.77%
...
56	公園などの親子で楽しめる環境が充実していると思いますか？	1.03	1.64%	17.66%	32.28%	29.42%	19.18%
57	産業全体の活性化につながるような企業の立地が活発に進んでいると思いますか？	0.99	1.05%	15.91%	39.06%	25.15%	18.83%
58	町内の商工業者が活発に活動できる環境整備が進んでいると思いますか？	0.90	0.58%	9.44%	47.79%	26.34%	15.85%
59	起業・創業しやすい環境づくりが実現していると思いますか？	0.90	0.93%	9.57%	50.29%	22.99%	16.22%
60	新たな農業の担い手が増え、魅力的な農業が行われていると思いますか？	0.87	0.47%	7.24%	50.12%	27.45%	14.72%
61	日々の生活を支える商業サービスが充実していると思いますか？	0.77	1.98%	10.04%	22.75%	33.49%	31.74%

[地域住民等ニーズ調査]

普段、買物・飲食・娯楽などそれぞれの目的別に、最もよく使う場所



出典：益城町中心市街地活性化基本計画（令和3年3月）

(https://www.town.mashiki.lg.jp/kiji0034452/3_4452_16307_up_q6m5lb1m.pdf)

4 町外に多くのお金が出、地域内の経済が循環しにくい構造

町内には消費や滞在の場が少なく、結果として支出が域外

町外への消費流出が続き、地域内で経済が循環しにくい構造が生まれています。地域で使われたお金が町の外へ流れてしまうと、地域の中で新しい仕事や活動も生まれにくくなります。

地域で稼ぎ、地域で使い、地域で回す。その循環を取り戻すことが、まちの持続可能性にもつながっていきます。

支出流出入率 2022年

	民間消費	民間投資	その他支出
支出流出入率	-19.0%	-23.4%	10.2%
支出流出入率順位	1,387位	1,078位	268位

[地域経済循環分析]
2022年/指定地域:熊本県益城町



出典：地域経済分析システム RESAS

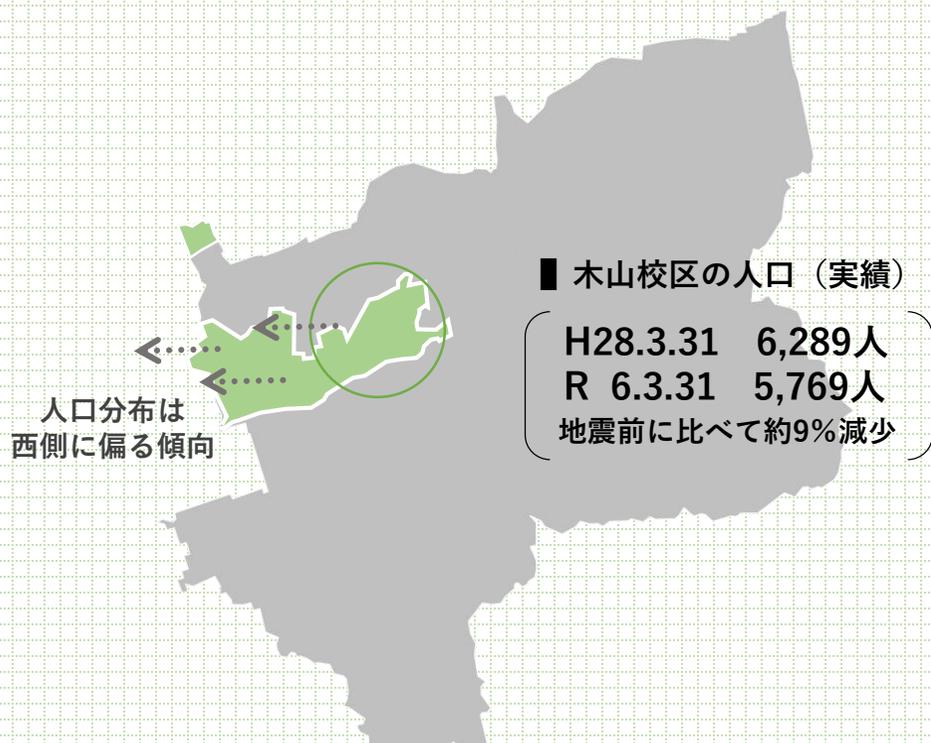
(<https://resas.go.jp/region-cycle-diagram/?tab=0&pref=43&city=43443&year=2022&level=city>)

4 多額の復興投資とは裏腹に活力の低下が懸念される木山地区

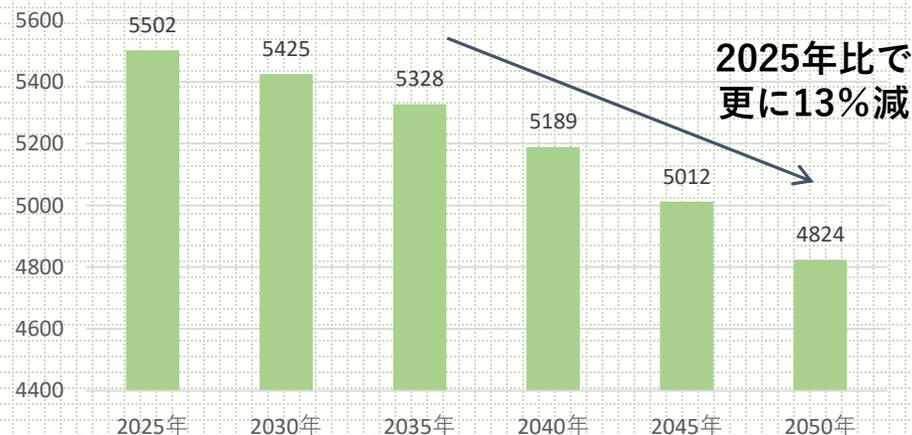
町全体の人口は回復傾向にある一方で、木山地区では人口減少の傾向が続いている

町全体の人口は回復傾向にある一方、木山地区では人口減少が続いています。このままでは子育て世代の流入が進まず、商店の減少や利便性の低下を招き、新たな投資が生まれにくくなる可能性があります。その結果、交通量の減少や公共交通の縮小など、復興で整備した都市基盤を十分に活かさない負の循環に陥りかねません。

本町の都市構造的にも木山地区の人口がこのまま減少し続けるのは望ましいことではなく、魅力を高める努力が不可欠と考えます。



■ 木山校区の人口（見通し）



※国土技術政策総合研究所将来人口・世帯予測ツールV3 (R2国調対応版) を基に作成

4 創造的復興の先へ — 創造的なまちの中心地を目指して

次世代に継承したいまちになるために

熊本地震の発災以降、復旧・復興の過程では、行政、地域住民、企業、大学、ボランティア団体など、これまで関わりの少なかった多様な主体が復興活動に参画しました。

また、全国各地からの支援や新たな活動の流入によって、地域の中にこれまでにない人のつながりや取り組みが生まれました。

こうした過程を通じて、人材（ヒト）、地域資源（モノ）、活動や取り組み（コト）が相互に結びつき、新しい連携やプロジェクトが生まれるなど、地域の中に新たな動きが広がっています。

例えば、復興支援をきっかけに地域外の人材が継続的に関わるようになった事例や、地域の資源を活かした新しい活動や事業が立ち上がるなど、復旧にとどまらない様々な取り組みが各地で見られています。

このように、災害からの復旧の過程で生まれた人のつながりや新しい取り組みを一時的なものに終わらせるのではなく、地域の風土として根づかせ、将来的には地域の文化や価値として育てていくこと。

それこそが、創造的復興の先にある姿の一つではないでしょうか。

Chapter

5

目指したい姿

5 3つの拠点が支え合う、木山のまちづくり

都市拠点を核に、仮設団地跡地拠点・運動公園拠点が連携するエリアデザイン

木山のまちづくりにおいて最も重要なのは、都市機能を集約した「都市拠点」において、町にとっての“心臓部”をつくることと考えます。人が集い、働き、消費し、交流する中枢機能を担う場所として、その役割を明確に位置づけます。

あわせて、木山仮設団地跡地では、災害時には防災機能を発揮し、平時には町民の心のよりどころとなる複合防災拠点を目指します。

さらに、運動公園は文化・スポーツ・レクリエーションの拠点として、町民の活動と交流を支える場とします。

これら3つの拠点がそれぞれの役割を果たしながら相互に補完し、相乗効果を生み出す。その連携軸として、役場前を通る木山宮園線を整備し、拠点間の一体性と回遊性を高めていきます。



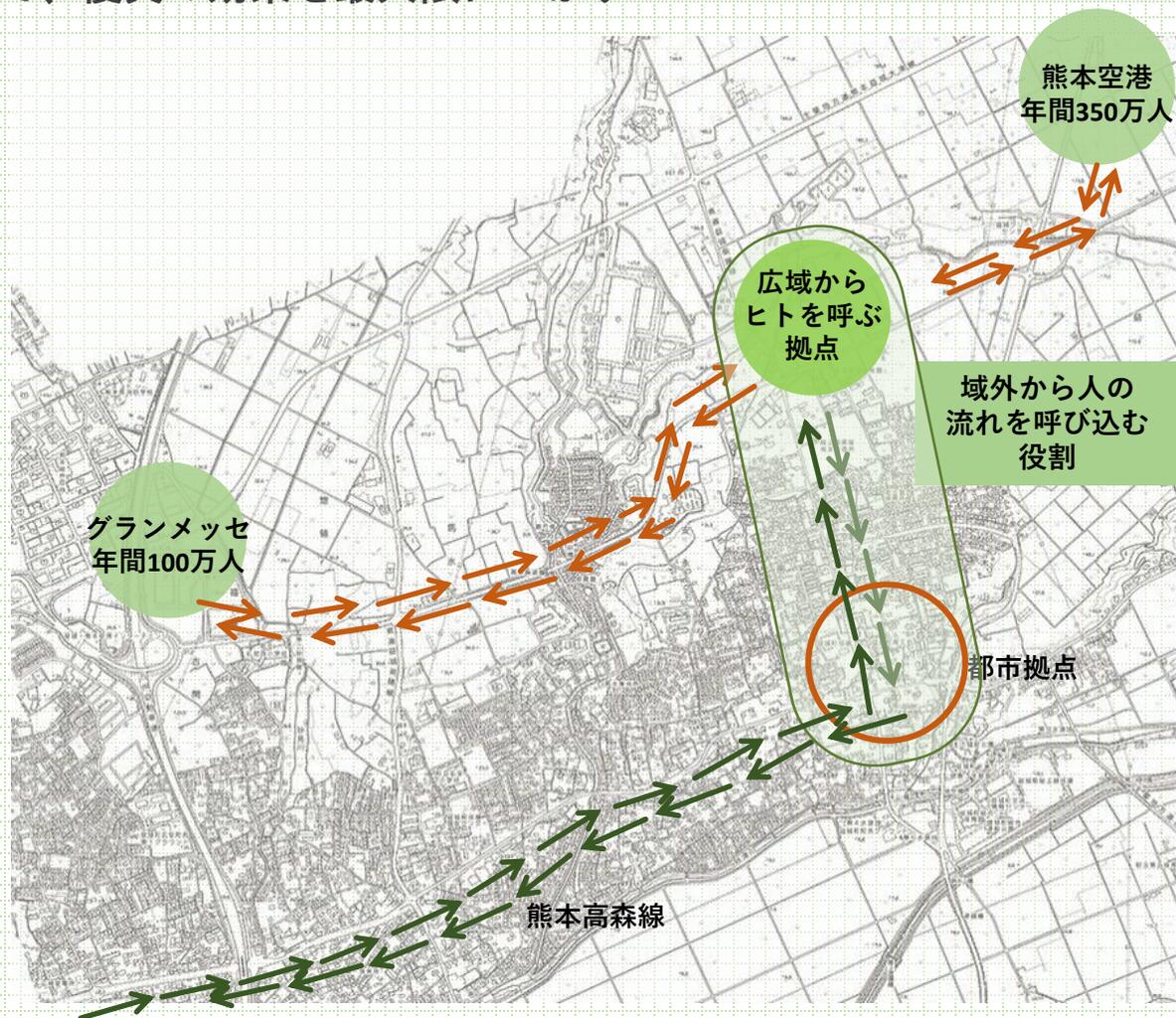
5 木山に人の流れを呼ぶ、誘客の導線

木山に目的地をつくることで、復興の効果を最大限にいかす

木山仮設団地跡地を、人の流れを都市拠点へ導く結節点として位置づけます。阿蘇くまもと空港やグランメッセ熊本といった広域拠点との接続を活かすことで、都市拠点に集約した機能の利用を高め、滞在と消費を生み出します。

その結果、ヒト・モノ・カネの集積が進み、県道熊本高森線沿道では土地利用の高度化や機能転換が促されていく流れが理想的です。

また、ヒトの流れを呼ぶ目的地を木山地区につくることは、県道熊本高森線の利用者増加など復興事業の成果を最大限にいかすことにもつながります。



5 町全体の復興を牽引する“都市拠点”

高次都市機能が集まるまちの心臓部

都市拠点は、益城町での暮らしをより便利で快適にするための原動力となる場所です。役場や商業施設、医療、交通など、生活に必要な機能を集めることで、町の中で日々の用事が済ませられる、コンパクトで回遊しやすいまちの形を目指します。機能が分散するのではなく、使いやすくまとまることで、暮らしやすさが高まります。

都市拠点では、現在進めている土地区画整理事業を軸に、必要な場所に必要な都市機能を配置していきます。都市拠点を整えることで、交通や商業、公共機能など都市としての基盤が確立されていくものと考えます。

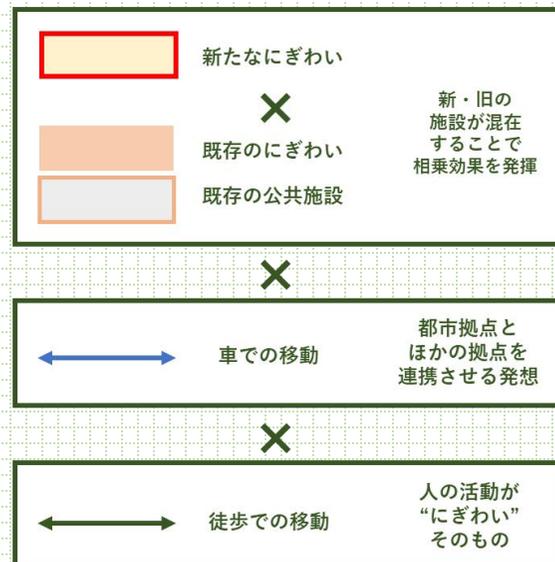
一方で、都市拠点に近接する木山仮設団地跡地一帯は、農・食・健康・防災などをテーマに、新しい暮らし方やコミュニティづくりを実践する場として活用していきます。

都市拠点におけるにぎわいづくりビジョン

2018年12月公表

場と連携した取組で、人の動きを作り出す

にぎわいは人の動きによって生まれます。この人の動きは、場の存在だけでは作り出せません。“木山まち”でも、地域住民によるイベントの開催や未来に向けたプロジェクト活動、交通機関の充実など、場を利用する人々による、場と連携した取組が必要不可欠です。もちろん、行政も、場の利用者として関わりとともに、地域の活動への支援等を積極的に行っていきます。



5 都市拠点と木山仮設団地跡地の役割分担

— まちの拠点にも、それぞれの役割がある —

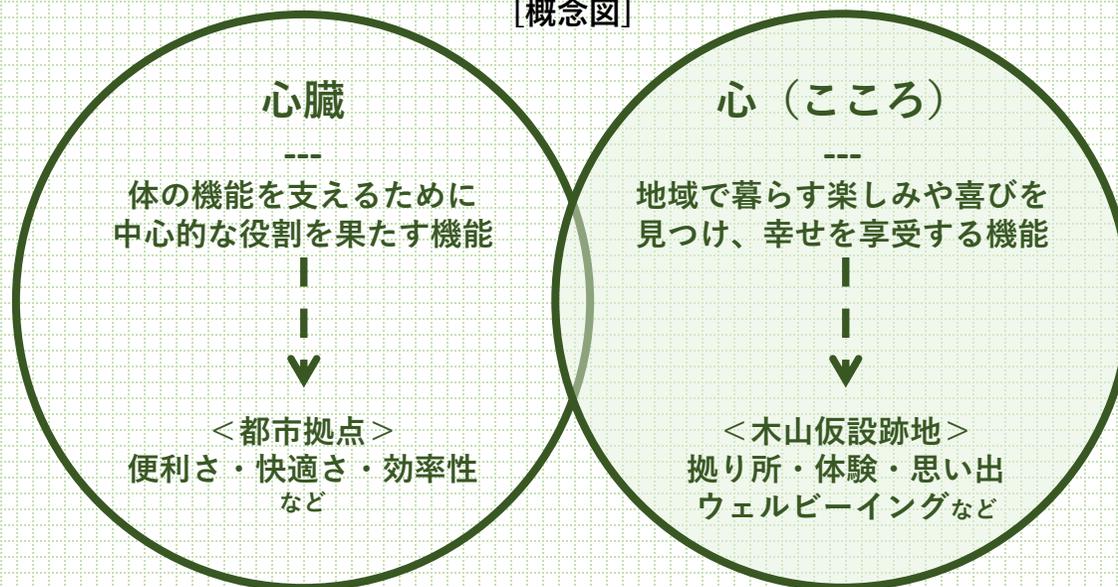
都市拠点は、いわば「心臓」のような役割を果たすものと考えます。

体の機能を支える心臓のように、都市機能を集約し、まち全体を健全に動かすための中枢的な役割が期待されます。

一方、木山仮設団地跡地では、「心（こころ）」のような役割を果たす場所を目指していきたいと考えています。地域で暮らす楽しみや喜びを育み、安心やつながりを感じられるような、心のよりどころとなることが期待されます。

拠点にはそれぞれ異なる機能がありますので、それぞれの役割を明確にし、互いに補い合うことで、拠点間の乗効果を生み出していくことも重要だと考えます。

[概念図]



木山仮設団地跡地における
暮らしの拠点づくり計画

木山ビジョンを踏まえた、木山仮設団地跡地のあり方

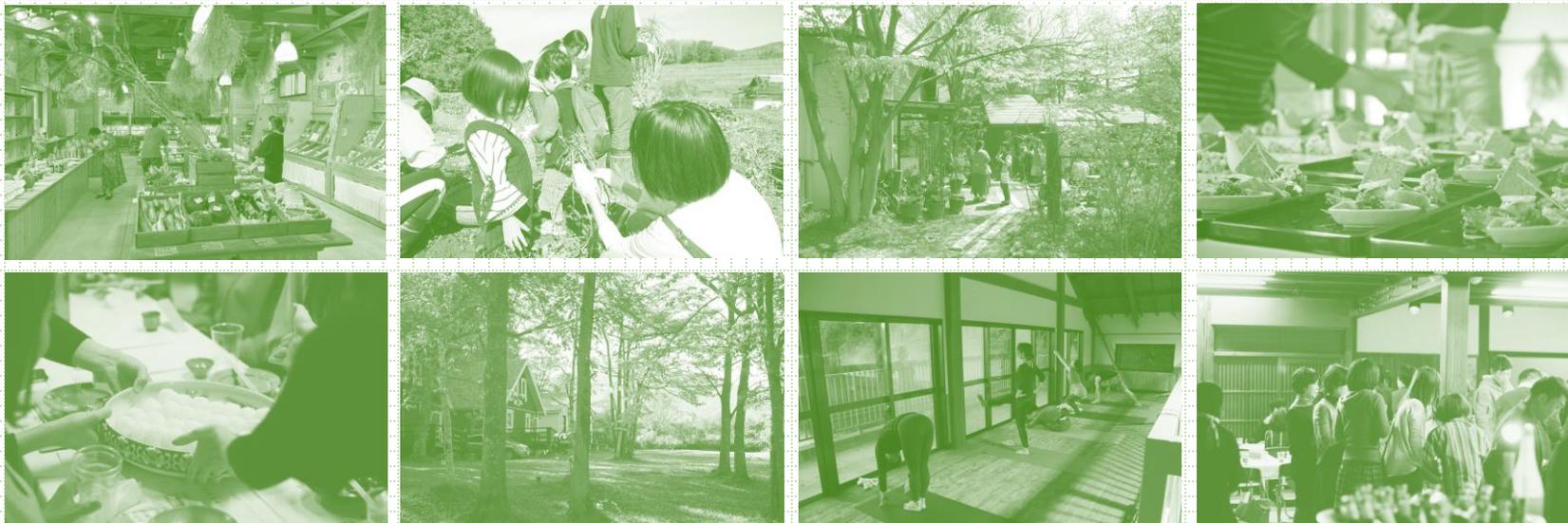
6 木山仮設団地跡地の重要性

“復興の象徴”から“創造の拠点”へ

木山仮設団地跡地は、震災後の支え合いの記憶を持つ特別な場所です。だからこそここは、益城町の未来の可能性を広げ、育てる“創造的”な場所になるべきではないかと考えました。

農・食・健康・防災・教育。こうした暮らしに関わる様々な要素を大切にしながら、地域に根づく暮らしの営みと新しい価値観を掛け合わせ、小さくても質の高い暮らしを少しずつ実装していきます。

そして、ここから生まれる新しい日常が、やがて町全体へと広がっていくような、新しい「暮らしの拠点」を目指します。



6 コンセプト

次の世代に残したい未来を デザインする — 50年後の礎づくり —

2016年に発生した熊本地震から、まもなく10年が経過します。この間、私たちは創造的復興に全力で取り組んできました。様々な取り組みを積み重ねる中で、まちは立ち直り、新たな成長を続けています。

この10年間の歩みを土台として、次の世代を見据える新たなフェーズの入口に立ちつつあるように思います。先人たちが築き上げた歴史や文化、産業、コミュニティをはじめとする地域資源を大切にしながら、次の世代により良い形で引き継いでいくための新たな挑戦を始めています。

これまで磨き上げてきた「元の状態よりもさらに良くする」という創造的復興の理念を今後も大切にしつつ、人口減少や少子高齢化、気候変動、災害対応といった全国共通の課題はもちろんのこと、益城町が抱える地域特有の課題にも正面から向き合っていかなければなりません。

社会環境が大きく変化する時代において、現状を守るだけでは地域の将来を支え続けることが難しくなりつつあります。そのような中で、ひとつのモデルとして取り組んでいるのが、木山仮設団地跡地を活用した事業です。

あえてひとことで言うならば、「次の世代に残したい未来をデザインする」取り組みだと考えています。それは、どこかのまちを模倣することでも、現世代の便利さだけを追求することでもありません。

子どもや孫の世代にどんなまちを手渡したいかを想像しながら、実現可能な未来を描いていきます。



6 7つの重要テーマ

単なる開発事業ではなく、次の世代を主眼においた未来志向のまちづくりとして、この事業では次の7つの分野を重視しています。

01 農 基幹産業であるとともに、景観や環境、食文化を支える地域の重要な資源

<イメージ>

- ・生産者と消費者が触れ合える場づくり・学びの場
- ・生産者の新鮮な農作物を購入できる産直施設
- ・農業の担い手不足を解消する農業を支える新たな仕組み



07 住まい オープンスペースや緑に恵まれた良質なベッドタウンを目指す

<イメージ>

- ・オープンスペースや緑に恵まれた住環境
- ・都市と農村のバランスの取れたエリア
- ・子どもが遊びまわられる住棟配置
- ・経年を味わいに変える工夫

06 教育 教育は地域の未来をつくる、意義ある取り組み

<イメージ>

- ・農や食、健康、防災等の分野における学びの場の提供
- ・益城町の将来を担う創造的な人材育成、マッチング支援
- ・自然体験やプロジェクト型の学習を取り入れたオルタナティブ教育



05 防災

被災地として防災力の強化は不可欠、次の世代への経験や教訓の継承も重要

<イメージ>

- ・被災地として次世代への震災の記憶の継承
- ・日常の交流・利用から生まれるフェーズフリーの思想を取り入れた防災・公園機能
- ・自然や農を体験しながらの防災コンテンツ整備
- ・次世代の環境負荷を抑えるエネルギーの地産地消

農 01

食 02



02 食 生命・健康を支える基盤

<イメージ>

- ・地元産の新鮮な野菜、果物を使ったレストラン・カフェ、
- ・料理家や生産者を招いた料理教室、食育ワークショップ、
- ・生産者と消費者が顔を合わせるファーマーズマーケット

03 暮らし 日々の生活を心地よく、楽しく送るために欠かせない要素

<イメージ>

- ・友人や家族と余暇を過ごす公園
- ・緑豊かなランドスケープ
- ・衣食住を満たす生活利便施設



暮らし 03

健康 04

04 健康 心身の健康に加え、社会的なつながりも重要

<イメージ>

- ・健やかなライフスタイルへと行動変容を促す環境
- ・身体の健康・心の健康・社会的なつながりの3つが整うウェルビーイングなエリア



Chapter

7

エリアの将来イメージ

Chapter

【注】本イメージ図は方向性を分かりやすくお示しするための暫定案で、確定した計画ではありません。今後の検討の過程で内容が大きく変更となる可能性があります。

7 エリアの将来イメージ

芝生広場の活用例

ファーマーズマーケット（朝市） マルシェ・防災イベント



公園内のイメージ

スマート農園



農家レストラン



産直施設



カフェ・ショップ



住・農・商共生 コミュニティゾーン

コモン広場と緑のある住宅地



なりわいと居住の融合



歩きたくなるウォークアブルなまちなみ



次世代育成 地域共生センター “カタル”

多様な学びができる環境 食育・防災・ヘルスケア等



7 “食と農”からはじまる、豊かな暮らし

イメージ①

産直施設や農家レストランなどを中心とした“食”と“農”の拠点整備

「食」と「農」は私たちの暮らしの基盤を作り、次の世代へと受け継がれる大切なものです。

土地の風土が育む食文化は、その地域の個性となり、人々を惹きつけます。

食が豊かな場所は、地域に喜びをもたらし、次世代の教育にもつながります。

木山地区では、産直施設を中心に、食と農の価値を学び、受け取り、伝える循環を創りたいと考えています。

産直施設は地域の農産物を直接届ける場所となり、農家レストランでは食と農のつながりを実感できる場を提供します。

また、スマート農園（市民農園）を整備することで、地域住民が農業を体験し、持続可能な農業への理解を深める機会

を作り出します。このような取り組みを通じて、地域の魅力を次世代に引き継いでいきます。



7 ウェルビーイングな暮らしが幸せをつくる

心も体も健康なライフスタイルを志向するコミュニティを目指す

イメージ②

私たちが目指すのは、「ウェルビーイングな暮らし」が当たり前になるまちです。心も体も健やかに、自分らしく日々を楽しめること。その積み重ねが、人生の幸福度を高めていくと考えます。

理想は、元気に暮らし、最期まで自立し、人生をまっとうすることです。これは個人にとっての幸せであると同時に、医療費や扶助費の抑制にもつながり、まち全体の持続可能性を高めることにも直結します。

そのために必要なのは、個人任せの健康づくりではなく、コミュニティまるごと行動変容を起こす仕組みです。

日常の中に、自然と歩きたくなる動線、地元の新鮮な食材を選びたくなる環境、人とつながりたくなる居場所を組み込むこと。暮らしそのものを“健康的な選択がしやすい設計”へと変えていきます。

さらに、ライフサイエンスやヘルステックの活用により、データに基づく健康管理や予防の仕組みも取り入れ、科学と地域の力を融合させます。一人の健康づくりではなく、まちぐるみのウェルビーイングへ。

木山から、持続可能な健康コミュニティのモデルの創出を目指します。



7 心のよりどころとなる場所や空間づくり

イメージ③

日常に開かれた、滞在したくなる公園

私たちが目指すのは、単なる公園整備ではありません。町民一人ひとりにとっての「心のよりどころ」となる場所をつくることです。

目的がなくてもふらっと立ち寄れる。誰かと約束しなくても、そこに行けば安心できる。子どもがのびのびと遊び、大人がくつろぎ、高齢者が穏やかに過ごせる。そんな一日過ごせる公園を、町のランドマークとして育てていきたいと考えています。

遊具や広場だけではなく、木陰、ベンチ、カフェのような居場所、イベントや日常の活動が重なり合う空間設計によって、自然と人が集まり、つながりが生まれる場へ。この公園は、にぎわいを生む装置であると同時に、静かに心を整える装置でもあります。まちの未来にとって欠かせないオープンスペースの創出を目指します。



7 もしものときも支える、フェーズフリーな公園

イメージ④

平時はいこいの空間、非常時は命を支える拠点へ

この公園が目指すのは、日常と非常時を分けない「フェーズフリー」の考え方です。平時には、子どもたちが遊び、大人がくつろぎ、人が集い、にぎわいが生まれる場所。カフェや産直施設を備え、一日ゆっくりと過ごせる心地よい空間として、暮らしに寄り添います。

そして非常時には、地域の安全を支える拠点へと機能を切り替えます。防災設備や備蓄、広場空間を活かし、災害時の避難・支援・情報共有の場となります。特別な「防災施設」をつくるのではなく、日常の豊かさそのものが、いざという時の強さになる設計へ。にぎわいと備えを両立させることで、地域のレジリエンスを高め、町全体の安心感を底上げしていきます。

この公園は、楽しむ場所であると同時に、守る場所でもある。日常も非日常も頼れる拠点を目指します。



Chapter

8

事業の実現に向けて

8 事業実現に向けたスキーム案

“復興の象徴”から“創造の拠点”へ

都市公園として整備

(事業主体：町)

整備にあたっては
PFI事業化を検討

将来的に導入検討

民間事業者を募って整備

(事業主体：民間)

Park-PFI制度の活用を検討

住居系の地区計画を策定

今後、民間デベロッパー
と調整

町 (もしくは第三セクター)
が土地造成し民間に貸出

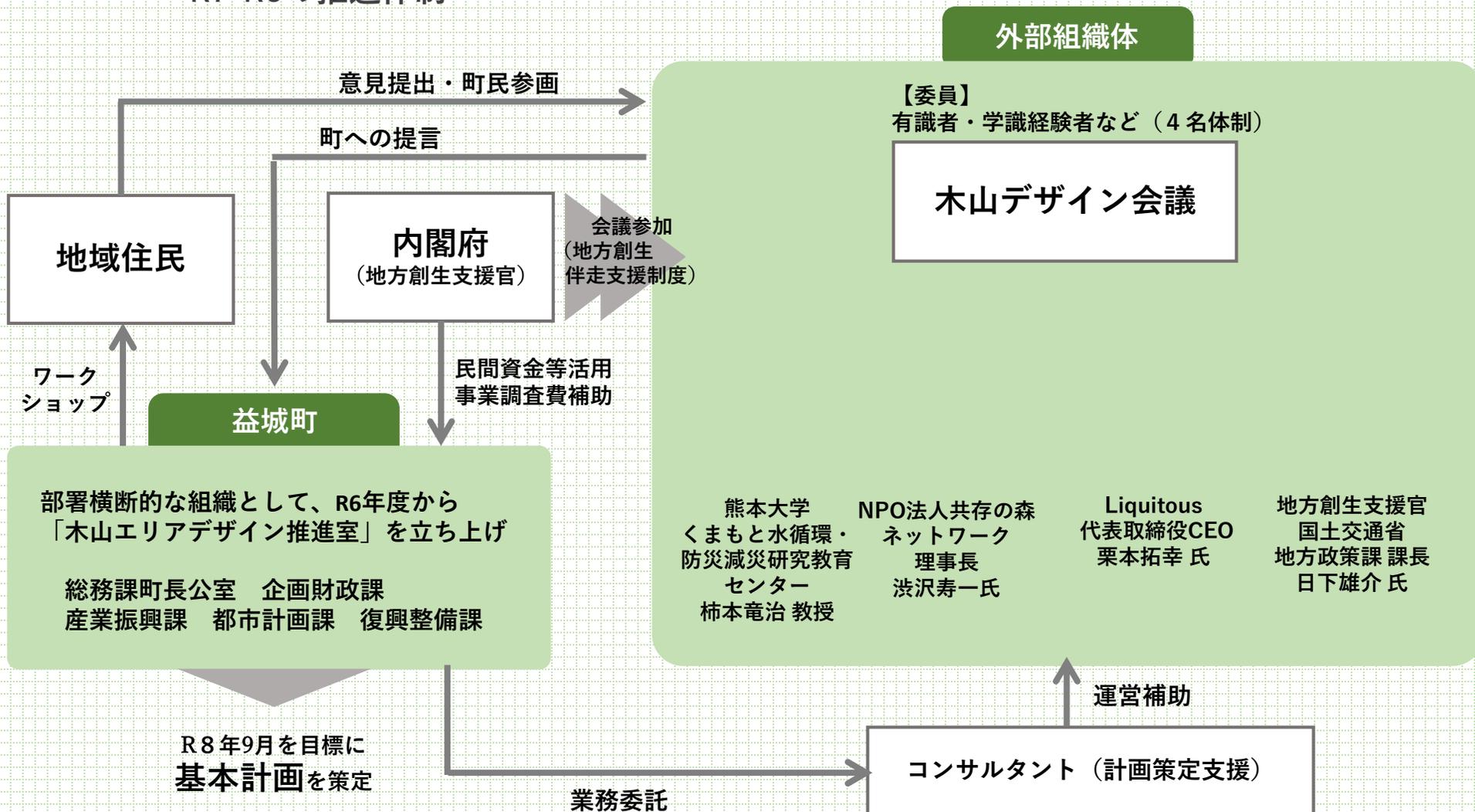
民間事業者が進出
(店舗整備)



※あくまで現段階でのイメージであり、関係機関や民間事業者との対話を重ねながら適切な事業スキームの検討を進めます。

8 事業実現に向けた推進体制

R7-R8の推進体制



8 実現までのロードマップ

		令和7年度 (2025年)	令和8年度 (2026年)	令和9年度 (2027年)	令和10年度 (2028年)	令和11年度 (2029年)	令和12年度 (2030年)
都市公園	用地の確保	買収(公社)・仮登記		本登記	買戻し(町)		
	法規制への適合	関係機関との協議	許認可手続き				
	計画・設計	基本計画	基本設計	実施設計			
	公園整備		調査測量	排水・交通協議	造成・整備	造成・整備	
	民間事業者との連携		民間提案	事業者の発掘			
産直施設等 (Park-FFI)	公募設置等の方針			公募設置等 指針			
	民間事業者の選定		民間提案 募集準備	公募⇒事業者 決定	協定 締結		
	施設整備				施設の整備		
住宅・生活利便施設	用地の確保	買収(公社)・仮登記				本登記	民間へ 譲渡・借地等
	計画・設計	基本計画	基本設計	実施設計			
	法規制への適合	関係機関との協議				許認可手続き	
	民間事業者			民間事業者の確保			宅地造成

※現段階でのおおまかなスケジュールであり、今後変更の可能性あり



益城町総務課

木山エリアデザイン推進室